

350 バセドウ病に対する¹³¹I治療後の血中甲状腺ホルモン値の変動

松岡功樹、飯野史郎（昭大藤が丘病院 内）、
長谷川真、石川直文、百溪尚子、真鍋嘉尚、
尾崎修武、西川義彦、伊藤国彦（伊藤病院）、
浜田 昇（大阪市大 二内）

我々はバセドウ病の¹³¹I治療後短期間の甲状腺ホルモン（甲ホ）値の変動について検討を行ってきた。今回はさらに症例を増やし治療後早期の甲ホの変動とその治療効果との関係についても検討を加えた。

対象は未治療のバセドウ病患者21名で、¹³¹I投与直前、投与後1日、3日、7日、10日に静脈採血し血中の甲ホ濃度を中心に測定した。

3名では¹³¹I投与後T₃、T₄は明らかに上昇したが、残り18名では治療後3～7日目には有意に低下し、FT₄も同様であった。T₃値は殆どの症例で上昇した。この両群間に¹³¹I投与線量やT₃値の変動の差はなかった。また以上の甲ホ値の変動と治療後1年の治療成績との間にも明らかな相関はなかった。

¹³¹I治療後早期にほとんどの症例で血中甲ホ値が減少し、¹³¹Iが甲ホの分泌機構に影響を与えている可能性が示唆された。甲ホが明らかに増加する例もあるが、この場合も濾胞の破壊と直接の関係はないと考えられる。

351 アイソトープ治療後のバセドウ病患者の血中遊離甲状腺ホルモン測定の有用性について

御前 隆、飯田泰啓、中島鉄夫、遠藤啓吾、小西淳二、鳥塚莞爾（京大 放核）

アイソトープ治療後患者の遠隔調査に際し、RIA法で遊離甲状腺ホルモンFT₃（Corning）、FT₄（CIS）を測定し検討した。対象は治療後6～25年を経過したバセドウ病患者151例で機能亢進群22例、正常群40例、潜在性低下群16例、低下群12例で他に補償療法中の患者が42例であった。FT₃、FT₄は共に亢進～低下群と順に低値を示したが、潜在性低下群と低下群では必ずしも分離は良くなかった。また機能正常群の32.5%で、FT₃が低値を示した。低下症の早期発見のためTSHとFT₃、FT₄との関連を調べた。相関係数はそれぞれ-0.525、-0.673と有意の負相関を示した。TRH試験を実施した27例の4TSHとFT₃、FT₄の間にもそれぞれ-0.420、-0.621と有意の負相関があった。FT₃、FT₄はそれぞれ潜在性低下群16例中9例、3例で低値を示し、低下群（TSH>20μU/ml）6例中FT₃は5例、FT₄は3例が低値を示しており、FT₄よりFT₃の方が機能低下症の検出感度が良い傾向があった。FT₃/FT₄比の検討では、T₄服用中の低下症の方が甲状腺未服用患者よりこの比が低値であった。以上、アイソトープ治療患者の経過観察にFT₃、FT₄は有用であった。

352 甲状腺重量に応じたバセドウ病¹³¹I治療計画

石川直文、長谷川真、百溪尚子、真鍋嘉尚、
尾崎修武、西川義彦、伊藤国彦（伊藤病院）、
浜田 昇（大阪市大 二内）、松岡功樹（昭大藤が丘病院 内）

バセドウ病の¹³¹I治療成績の向上は¹³¹Iの照射線量の如何にかかわってくる。我々は¹³¹I治療平均7500Rad群、10年後の成績、平均3500Rad群、5年後の成績を比較し、¹³¹I治療の成績に与える最も大きな因子は甲状腺重量にあることが判明した。すなわち甲状腺腫が80g以上の症例では3500Rad投与により96%の症例で、7500Radによっても50%以上で効果がみられなかった。逆に甲状腺腫が50g以下の症例では3500Radで7%が、7500Radでは30%以上の症例が機能低下状態に陥ることが認められた。さらに¹³¹I治療後の甲状腺機能状態を残存甲状腺腫との関係でみては治療後3年で甲状腺腫が明らかに触知される例では83%が機能亢進状態にあり、ほとんど甲状腺腫が触知されなくなって始めて機能正常になった。以上の結果より甲状腺重量に応じて¹³¹I投与量を調節する治療のプログラムを作成して施行している。

353 SP-ECTによる良性および悪性甲状腺腫瘍の鑑別診断について

宮本忠彦、中村 勝、岡本 陽、駒木拓行、佐藤紘市、高橋 豊
（天理病院、RIセンター） 浜田 哲（同、内分泌）

われわれは、前回の本総会でGE社製マキシカメラ400Tを用いたSP-ECTによる甲状腺重量の算出法を報告したが、今回は本法を用いて甲状腺の良性および悪性腫瘍の画像診断を行い、その成績を従来の投影シンチグラム法と比較した。対象は、甲状腺癌7例、腺腫および嚢腫5例で、いずれも手術により診断が確定した症例である。方法は、患者に200～500μCi¹²³Iを経口投与し、3時間後に2.5倍拡大SP-ECT法により甲状腺シンチグラムを作成し、腫瘍部Tおよび正常部Nの単位体積当りのカウントを測定してT/N比を算出した。T/N比が0.2未満をCold、0.2以上を比較的Coldとした。また、甲状腺の両葉の重量を測定し、患側葉TLの正常葉NLに対する百分率、TL/NL%を算出した。良性腫瘍では投影法およびSP-ECT法ともに比較的Coldであった。悪性腫瘍7例中2例が投影法で比較的Coldであったが、そのうち1例はSP-ECT法でColdであった。TL/NL%は、良性腫瘍では52.3～90.6%（平均77.6%）、悪性腫瘍では0～95.0%（平均51.9%）で、良性腫瘍が一般に大であった。SP-ECT法は両者の鑑別に、より有用であった。